

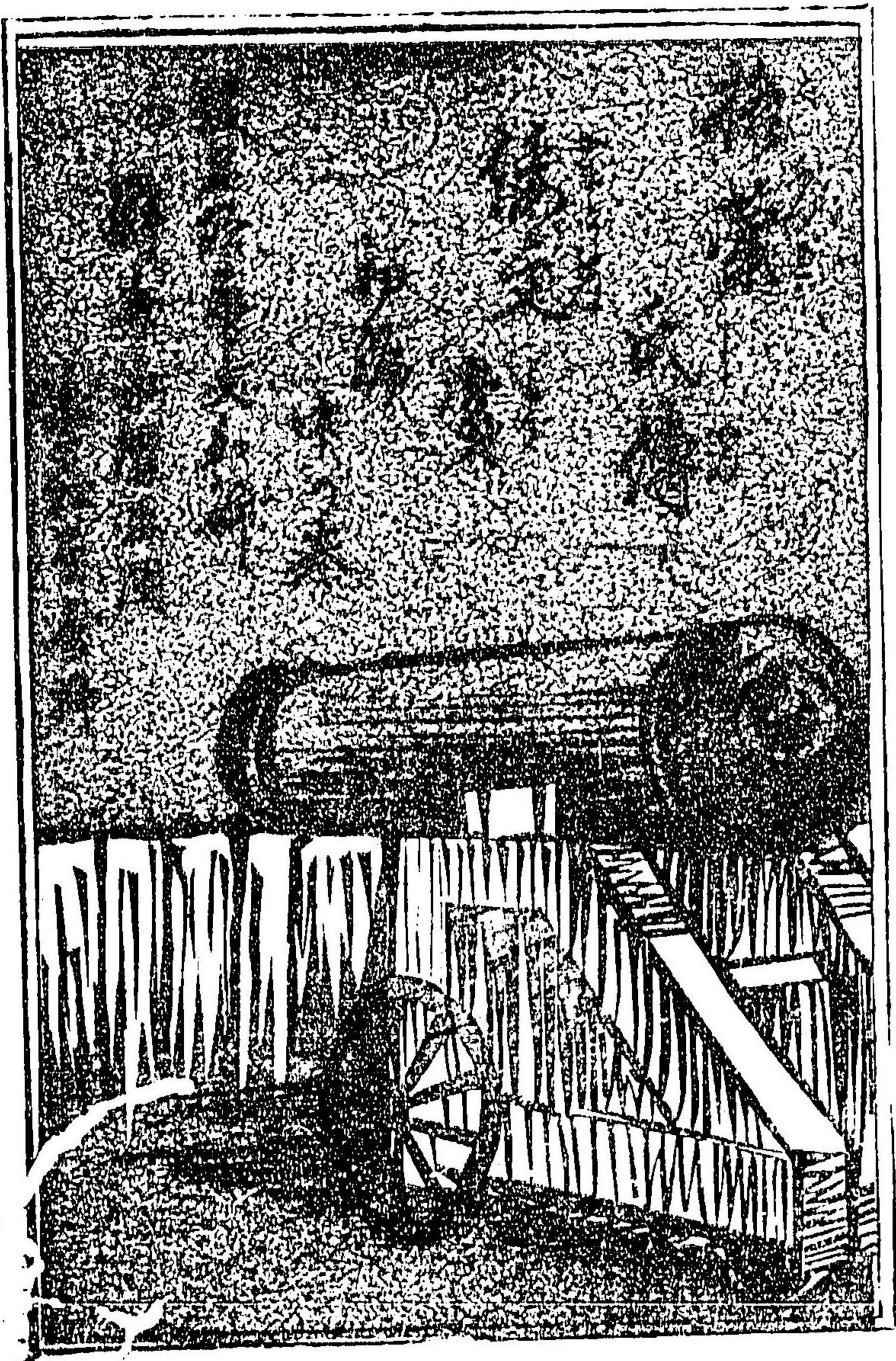
格蘭氏傳切中

格蘭氏傳倭文章初編中之卷

大日本

假名垣菅文和解

備もグランド君の所をより父への事と
 可也とあり藤て斯へ有うと思ふよ
 符と合せる我ふの願ひ成達しやんと
 そのを後きと求むる中漸くあし此
 の代議士河某の周旋にてウエストポ
 ントとの土地の陸軍士官学校に入
 たり一是より日英勳と勉め四ヶ年
 一七卒業し一年廿二の七月一日始
 陸軍少尉に任ぜり且若の同級三十
 九名その第一十一位に止るべき事
 名を得るふも第一に空しく二年を



格蘭氏傳切中

格蘭氏傳倭文章初編中之卷

大日本

假名垣菅文和解

備もグランド君の所望より父への事と
 可也とあり豫て斯へ有とと思ふよ郭
 符と合せたる戦子の領ひ派達一やんと
 そのを續きと求むる中漸くみと此初
 の代議士何某の周旋するウエストポ
 ントとりの土地の陸軍士官学校に入
 りて一年業一年廿二の七月一日始め
 陸軍少尉に任ぜし是名の同級三十
 九名その名二十一位は止べき事での名
 譽と得るふも是ら空しく二年と



リコルン氏

此の地を
戦ひを闘た
る此戦事と
交戦す此より

此の勇名と一層励まし大將リコルン氏よ

後ひて西の方メキシコよ

出陣一週年六月

八月をゆく

バルルトと

其
重田ふ
論入り
をむ
進む
更ふ
かく弾業
りも亦
かあり



リコルン氏

大小十に戦グラ
ンド君の勇極
毎戦の軍功
比類なく
中ふも同
年九月

二十三日の
モンテレー海
の連戦之日

打撃きたるその
中ふも同氏へ兵卒と
激しく指揮ま一敵の
中後へは突入りたるふとまつて

固く戦ふ

を以て命ふ及べ

と同氏ハあり

勢よく進まなく

士と励は八方

よかけし

既月ハ

とまら

智の若馬と引を初と

看るより引あつたりの足と

戦まうけたりのみあてを

ひた欄とひと頼むと

とる者どもつけとを

谷前式四中

二

ついで直ちふむらうの敵軍の圍を破
おもひの衝破り難なく味方の本營に
達せし上援けの兵とていひて
再びあまのの跡と
ゆるぎて及して世の
幸あるぬ功績いと
立一ふは是より昇
りて大尉に任ず
その名は遠
近に東に
たりき程
ふグランド
君にめしとの▲



グランド君

大塚組の約束
ありてあまの
職にあはし
地を
狩りて
の式
とひ
とひ
下して
男の
近傍に



戦ふ
法あり
その後には
陸軍に在りて
霜十一年のその
いささの事不勤勞
せしが三十三の時七月
三十一日よその職を辞し
家より帰りて農まつけり
是より翁同氏ハジントルイと
りる地の大商人フレデリック
テンド氏のむまあジュリヤと云
みひ



つぎ 斯てハ保トと
 思ひを廻ら—又イルリノ
 及のガヤレナとりの地に移り
 幼あは頃より父の習ひ—みめ
 華を造り、その家と潤—年
 二十九小なるまを空—
 口と糊せ—ぐ巻
 異天の時あり
 うま西曆一千
 八百六十一執
 米國織くふニツふ
 分大發動を起り、且此發
 札へ合元國南於の緒弱北

ツユリヤ

▲暮らん
 と同年四月
 十五日此令と
 普く國中ふ
 傳ふる小
 此時グラニ
 ド居へ
 僅く小
 全戸の
 煙りと
 わる職
 尋る



ふよ誰をて
 獨立せんと
 謀叛の
 旗と奉
 りと
 閑く

▲その時の
 大統領リン
 ゴルン氏へ安
 ぬ事と思ひ
 急ぎ兵を

奮つて逸くも
 近郷の同志
 と招き、月十
 九日己よ一
 國の義つ後



つぎ 軍と
 おもむく此
 人々軍の
 進退敵
 攻守りの
 綱練と教へ
 示して出
 の日限遅
 待ちたりその
 中みグラント
 君の此

公使の任
 と命せし
 君の己と得
 老をの
 胸の
 溢るる勇
 心とあふ風

みはた
 雨よ
 兵と集
 るみ
 かり



△及の知事み
 對面一松者義
 軍大隊の副官
 とありて南とウウリ
 及よ出陣一南
 軍と備修り
 被筒さる
 を一戦と挫
 ぐんと強て
 のぞむも知事み
 修さるる更めん
 君の兵隊と

聖
 旬
 月
 一

リ
 兵
 二十
 一
 号
 の
 大
 隊
 長
 み
 たり

先月
 南
 報
 之
 ソ
 リ
 兵
 の
 セ
 ネ
 ラ
 ー
 ル
 ホ
 ー
 フ
 の
 地
 之
 跡
 兵
 隊
 之
 跡



八月七日イール
 の會儀負えそふ
 芳名一時は斐然
 ありけんこと必
 達一人のふゆ
 かなと屋まぶ敵
 ひ兵卒の望ま
 進運その指
 揮國の適
 ランド君の

ランド君

備ゆクラ
 ンド君ハ勢
 ひさあつら
 被竹のこ
 飛船の雲
 み取らるる
 九月有
 自々大兵と
 ひたつ敵の
 業塞み押さ
 へるがう大満の
 若とち競もの
 魚子とあふる



義軍の
 参謀み任せ
 らは九月一日
 更みミツリ
 の東南み屯ろ
 まる保兵の
 指揮長ふ
 界りしとて
 月氏ハ勇と
 とびてカイロと
 りる地ふ本陣と
 構へつ南の兵の
 やまを火ひる

各領式傳

かくエイク声ふとら
 ぬと侍まてひたる
 南の軍兵北軍まき
 激塵よせんと揚ひ込ん
 枕戦まきふ北軍ハちつと
 勝せま肩さた拵へて打
 せあるみ流たよ湾る南軍
 ぬ忽ちふ教札一我一され小
 估へを崩しペルモンドとさ
 敷をいれバ君ハ初めの一戦
 小テネシー河ハのバチエカ街と
 まり此傍のそりオハヨ
 テネシ河の咽喉水軍の

紅ひの霧雨を降らせりと鉄が重
 ちを一勝負の分をさるみ南軍の砲隊の
 時をよひの世と打並る大砲は粗い
 込めてらち敵の砲隊の何れか一人
 もなく忽ち中軍の營塞より敵軍は
 ろぐしまふ敵軍の兵頭とをさるへく
 敵軍はこれバサを別れの中軍の
 めくさむを降らせりと南軍一度不攻め
 よせて息を絶せを標立らし
 さそが勇猛比類ある
 グランド君も兵士の
 孔とふ

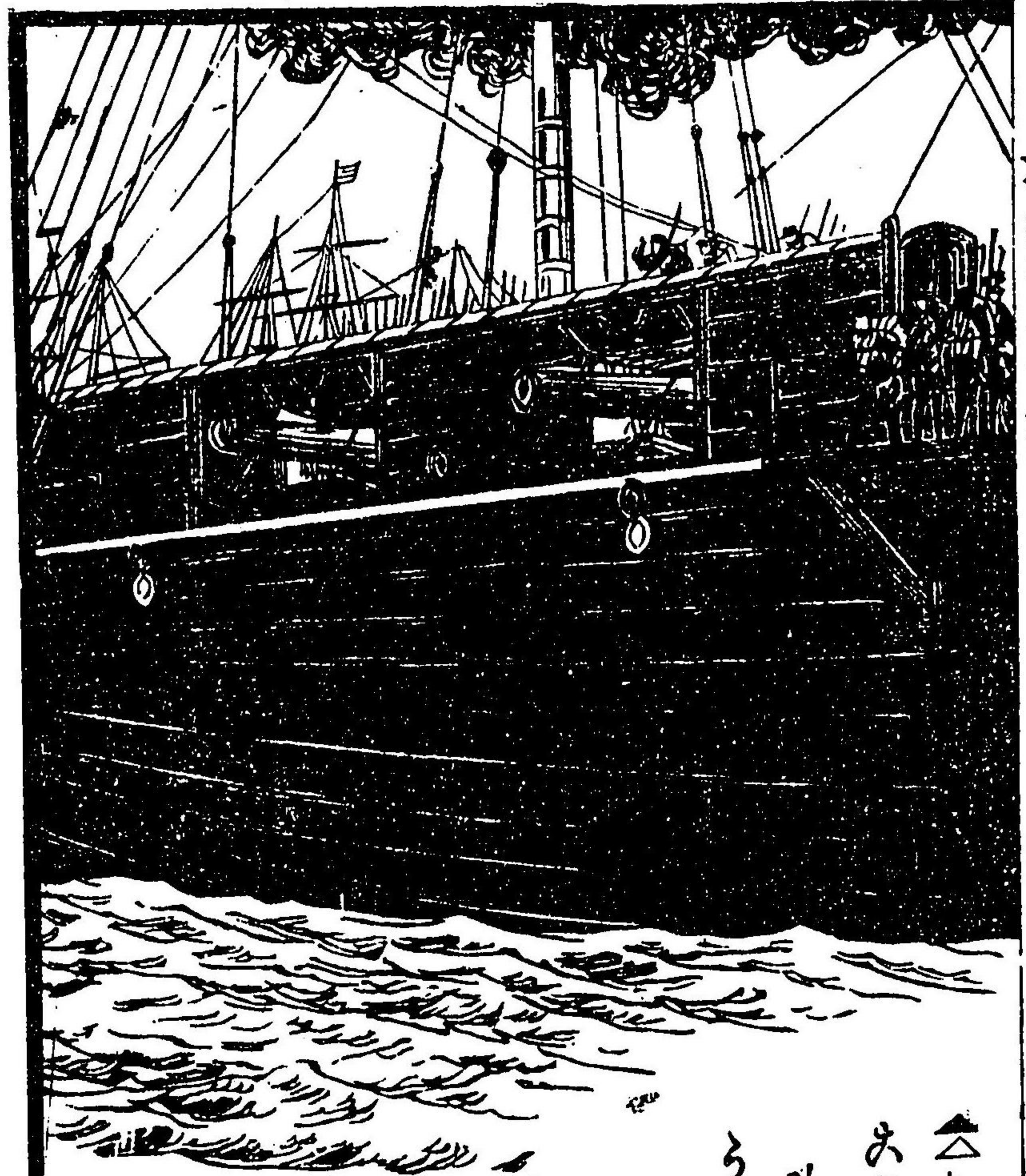


一先此場とありぞ
 かんといと先引
 法けてる人々を纏め
 敵軍はち退けた
 縁引の隔り
 なると砲隊の間
 迫た敵の退
 拂ひの退
 遠く
 退を

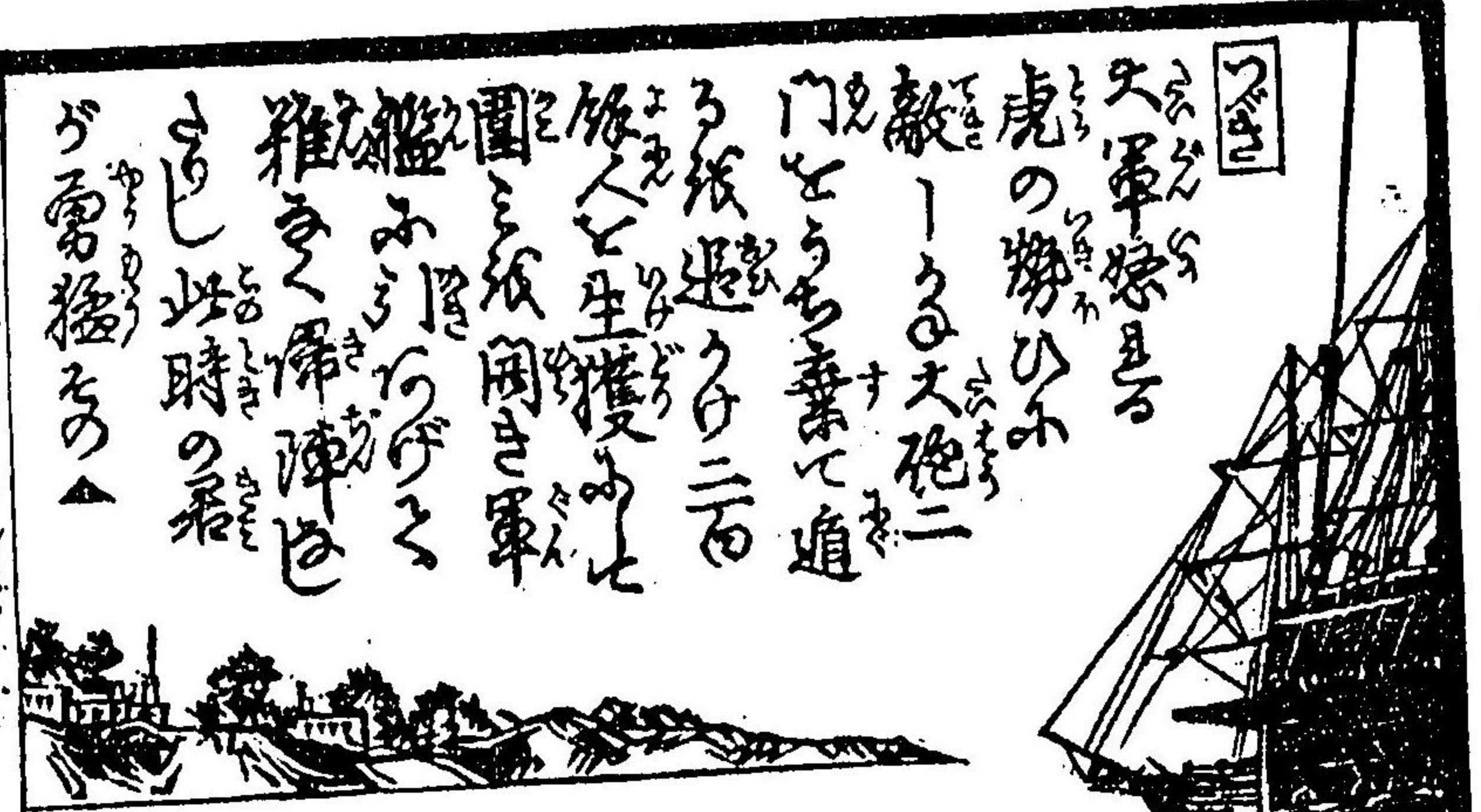


南軍の陣中

道は
 南軍
 兵士
 退く
 南軍
 兵士
 退く

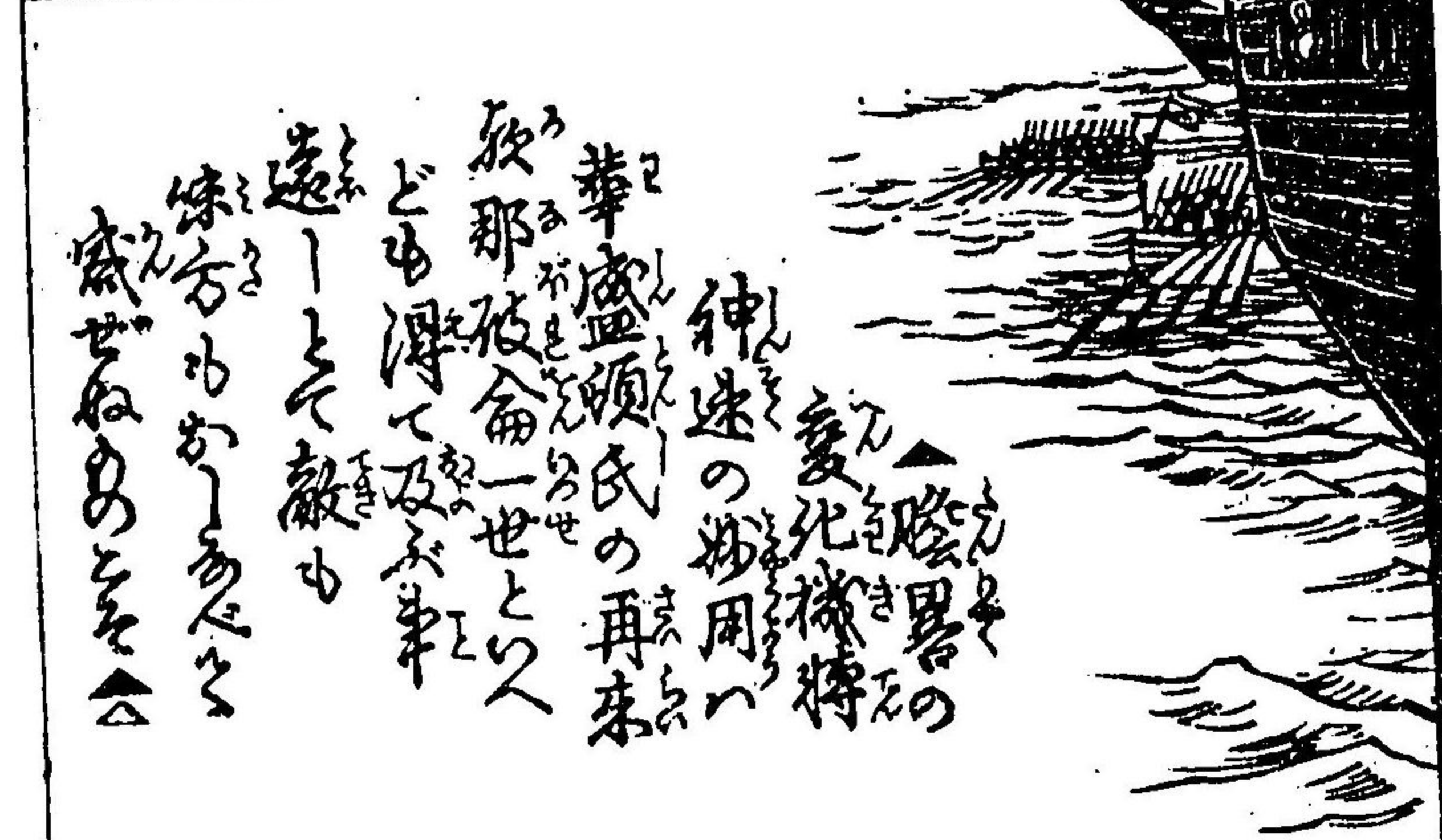


△なうろくは
 みの故又南軍
 も臆しと退
 うちの志ひを
 断ちしと
 其の軍よ
 南軍の
 死する
 者と傷
 人の六百
 と十二人
 少く軍を
 筆を其六



△大軍は
 虎の勢ひの
 敵一々の大砲二
 門をうち棄て追
 う後退する二百
 餘人と生獲めし
 圍を破り南軍
 艦ふりつらげり
 雅き帯陣は
 さし此時の若
 が奮猛なる△

水戸黄門漫遊記



△艦隊の
 変化機轉
 神速の妙用ハ
 華盛頓氏の再来
 敵那破命一世とい
 ども得て及ぶ事
 遠しとて敵も
 味方わかへんと
 感ぜぬものぞ△

△大軍は敵より
 二十人不足
 せりとを○ある
 程はその翌年
 の春と迎へ
 グランド君ハ
 此とため大將
 ペルツク氏ハ
 上書しと南
 於ホールトシ
 リーの地を
 進軍し敵
 の右の△

乙

